

下御歸朝奉祝茶話會あり、十月十六日には在京同窓會紀念參拜あり十月二十七日より三十一日まで、江ノ島鎌倉横須賀方面に修學旅行あり、十一月九日宇田川教授送別茶話會あり、十二月五日會計幹事富田君依願免職せられ江原幹事兼任と決す、十一年一月十一日新年茶話會あり、二月十六日宗祖降誕會に於ては全校各教室の室内裝飾中一の緣門中一の塚原三味堂中一の徳勝童子中四時宗の靈夢中五の人物展覽會高全のコーヒー接待等、各々趣向をこらし雨天にも關せず非常な盛會であつた。夜間の余興としては聖劇劇聖者の半生、佐渡塚原阿佛房歸伏、喜劇萬歲題目、西洋奇術、歌題目等參觀者四百名實に稀有の盛況であつた。四月十二日には東京別院に舉行せられた法主小泉日慈和尚謝恩會に太田純志神同義法二君出張參列した五月二十三日から二十八日まで東京日光中山の方向に靈跡參拜の春季修學旅行あり、七月五日清水教授遷化の爲め本葬參列代表者として結城瑞光君渡邊泰深君出張された、九月一日には舊教頭關本龍門師を送り、新教頭富木義廣師を迎へ、全生徒、設深支院、深敬病院長學院出身者諸氏の出席あり、又學院の追憶も層一層の基礎付けられた事を痛感した。九月十二日龍口法難會茶話會並幻燈會を開催した、十月四日には臨時學生大會を開き秋季運動會の件に就て議し、十月二十七日學制發布紀念として陸上運動會を開き、大々的に祖山健兒の勇猛精進振りを遠感なく發揮した。十月三十日學制發布五十年式典執行、十一月十一日入營者石黒湛然君秋山清吾君辻行眞君森泰常君送別茶話會開催、十一月二十日立正大師諱號宣下書奉迎二十一日奉安大法會等であつた。

もつと詳細の事件を報導するのは當然であるが、教報や民報紙上と記事の重複するのは好ましい事でないから此の位で許して戴いて

此の第二卷第一號が宗祖入山六百五十年といふ嘉辰に産聲を擧げた事は、のみならず二月十六日の聖日を卜して發刊した事に、何等かの意義と、深刻なる印象を思ひ致して戴きたい。現今、宗教對藝術問題の渦中に、何物を見出さんか現代人はもがいて居るのか學師は、「聖人凡化よりも凡人聖化」と垂訓されて、居る。私達青年僧侶は幾多の醜き階級差別と、政略鬭争より脱して、退嬰保守を擊退せねばならぬ。そうして燃ゆるやうな自覺と、嚴肅な氣分に、世法即妙法の靈妙味を眞に體驗せねばならない。(赤重)

講演部から

時運の趨行、今や兵武の交戰其の跡を陰し、方に舌鋒を交へて、其の俊ぎを削る兵和戰となつた。

惟ふに、平和戰自ら文筆、言論の二途が有る、文筆の効顯亦驚歎すべきで有るが、一たび四筵を壓する雄辯の快起らば文筆自ら第二位に陥るの感が有る、曰く彼れは間接的、消極的で有て、此れは直接的、積極的、實際的で有る謂つべし雄辯の途たる其の範曠く、其の用多なりと。

知らずや西曆B.C.年間アテネの志士デモステネスが、雄辯を揮ひグリークの危急を救はんとして、西紀十六世紀にマルチン、ルーテルの宗教革征の叫び又浩ける大雄辯ではないか。或は德行、言論、政治、文學の四科を立て、殊更にアンテーの光を説き人道の軌範を示した東洋の哲人孔子は、當時の周を以て、天下を統一せしめ中華永遠の計を畫らんとしたのも、亦雄辯を以てしてではないか。覆天の大聖佛陀の長廣舌は法界を蔽ひ、末法癡季の長暗を照破せる萬餘

の典籍、亦雄辯の莫ならざるはない、大聖日蓮が宇内の靈元たる扶桑國に降臨して、國家安康四海版抄の大理の下に破耶顯正の大絶叫を遊ばされ乃至、六十年の御生涯を續る史實は皆之れ雄辯の實ならざるはない。而して、彼の爲政者が言論以て國家否世界を左右し或は三歳童の戯論遊舌、また山川草木の自然鳴乃至、樹間梢頭に轉るす鳥の聲、一つとして雄辯ならざるはない、あ一偉なる哉不爛三寸の舌頭、大なる哉辯論遊説の世界。前に我か祖山の遊子は、一世の仁人四海の聖者たる宗祖久遠の流辯を汲み、其の耕籍唐術日々にいや増し滔々快辯の意氣天を衝き、徭税の舌頭縱横に宇宙の玄理を論述して倒行逆施混渾其の暇趣を知らざる思潮の濁流を清々飯一の清流に化し、妙玄法爾の大光を宣揚して世界雄辯の猛者となり、宗門法器の實を發揮せんとして居る。想へ、延嶺雄辯の花は方に開かれ、驚天動地の葉を結びんとするな。

驚峰開闢の幕は開かれて、己に六百五十の星霜を経た祖山本化の雄辯は、社會の進展に伴ひ、其の文化に相和し、久遠の生命を把持して、世界人類の上に、遺憾なく實現されて來たので有る。而して我が同窓會講演部の長足の進歩は勇猛精神、不懈心の健兒に依り表現されたので有る、講演部の練兵會は一周二回、水、土、各十數名の辯士の熱辯に連れて、新眞の氣分を表發し、耕籍の實を擧げて居る。のみならず、每學期開催の聯合雄辯大會は、本化獨特の雄辯を吐露して内ち大教的に、外ち社會的思想の上に將又現實に向つて咲いた雄辯の華は美にして且つ大なるを見る。又高等部生の山内布教及び甲五の特派布教(本妙臨師の居庵)は不慮齟達向上の路を開き、或は他地方有志諸彦の招待に應じ幻燈携帯出張布教をなし、爲山爲宗實社會に新生命を付與して止まないのので有る。然かし世界文化の

要求に従ひ、眞の完全を期する迄には、尙幾多の努力と熱誠を要するは勿論で有る。方に覺醒の歩調を揃へた生等青年求道者は雄辯の實義を闡明して、本化的理想の下に基礎付け全人の上に、眞の樂園平和の天地を創造し、而うして生活の安定を與へなければならぬ是れ祖山講演部の生命にして、且つ吾人の責の存する所で有る。

今大正十一年度已降の延嶺及び他地方に於ける講演布教の實狀を略記せんに。

六月廿五日各級聯合雄辯大會開催(於本學院講堂)

高山 幹事

開會之辭

中一 佐藤 隨感君

愛山の思

中二 森島 見薩君

眞の救世主とは?

中三 渡邊 要孝君

久遠の御光り

中四 間宮 感應君

生活の意義

中五 佐野 玄榮君

原始佛教の眞髓

高一 福島 瑞岳君

過度期に於ける吾立脚

高二 太田 純志君

來るべき民衆運動と吾宗徒の態度

高三 結城 瑞光君

部長の挨拶

鈴木 教授

閉會之辭

江原 幹事

七月已降五十日余の夏季休暇を利用し本院の囑託に依り出張講演をなす。

會場

九州長崎縣及岡山地方

期間

自八月上旬至八月下旬

講師

本學院教授鈴木文學士

應援

本學院内九州學友會

會場
期間
講師
應援

北陸各方面
自七月下旬至八月上旬
本學先輩伊藤海聞師
本學院内北陸學友會

同夏季休暇中、自八月五日至七日三日間左の名士を招聘し於本院大講堂講習會開催す。

法華經の神髓と日蓮教義の要旨
清水 龍山先生
濱田 文學士

大午の文化の建設

本學院生一同聽講す。

九月廿八日出張幻燈布教
會場 本縣西八代郡岩間妙現寺 本學院出身小林宣師(住職)

出張者 辯士 高二 戸田 文明君
高一 江原 亮勇君

右同日

會場 郡内靜川村石畑來光寺

出張者 辯士 高三 結城 瑞光君
中五 富田 海音君

十月十日

會場 山内妙石坊 對告衆甲府市團參七十余名)

出張者 辯士 高二 岡 觀 修君
同 太田 純志君

高一 福島 瑞岳君

十月廿五日

會場 山内林藏坊

出張者 辯士 高二 戸田 文明君
高一 江原 亮勇君

十月卅一日

會場 本郡南部妙成寺

出張者 辯士 高二 岡 觀 修君
同 太田 純志君

十一月六日 技師 中四 原 智 眺君

十一月六日

會場 七面山本社

出張者 高二 岡 觀 修君
同 戸田 文明君
同 太田 純志君
同 森田 一 籬君
高一 野崎 學 隱君
同 安藤 教 全君

十一月十一日 本學院生入營者(五名)送別茶話會

同 廿九日 第二回聯合雄辯大會(於本學院講堂)

開會之辭 岡 幹 事

義の觀念 中一 今泉 智 淨君

日頃の想 中二 吉川 啓 善君

宗教より見たる労働問題 中三 桑 觀 行君

學生の自覺 中四 森 泰 常君

吾人の覺悟 中五 渡邊 泰 深君

開れたる眼 高一 安藤 恭 善君

勝ちの哀みと弱者の誇 高二 森田 一 籬君

さゝがいの系 高三 結城 瑞 光君

軌近宗門内部に動く二大思想 鈴木 教 授

部長の挨拶

閉會之辭

十一月三十日

會場 静岡縣川崎町法光寺 本學院出身小屋舜正師任職)

出張者 辯士

高二 太田 純志君

高一 福島 瑞岳君

技師

中四 原 智 旺君

以外に登山參拜團及青年團に對し講演布教せし事數多今は悉皆列記するの余裕なければ略す。

終りに先輩並に有志諸彦の御後援と會員一同の熱誠とを以て講演部の益々隆盛發展の程を切望す。以上 (嗚月記)

文學部から

過去を救ふ事を知つて未來を救ふ事を知らぬものや、未來を救ふ事を知つて現在を救ふ事を知らぬやうな諸種の宗教團體が、雜亂の地上に所夾まきまで列べられて居る、人心救濟、生活改善、社會淨化、此等が宗教運動の目的であり理想であるならば、今後の宗教家は人類主義に徹せる信愛を表奏しなくては、光り輝く宗教生命には觸れ得ない。伽藍佛教の獨禪寂主義は像法過時の遺物、個人解脱の自利的行動は正法時代の化現である、今にして吾々青年宗教家が自覺しなかつたら、共に冥きより闇きに入ることをしたならば、人間は華に動物以外の何物でもない、神や佛がそが寵兒として何の爲めに理智を與へたのであるう、上有頂から下奈落に住む吾々の心は本來本有の眞理ではないか、そこに確かに沈んで居るのは宗教の眞髓

ではあるまいか、その法性をしつかり握り得た人々こそ佛陀であり聖人である、法は人に依つて榮える。そうだ宗教は人に依つて現はれ、人に依つて培はれ、そうして人を養ふてくれるものだ、現代に於て其の表現方法に二方面がある。一は辨論と、一は文筆である、今辨論の價値を云々する場合ではないが、批判は對立的にせればならぬ、姑息な見解かも知れぬが、辨論は横に空間的(十方)の所産で空のもので、文筆は豎に時間的(三世)のもので有である、然らば存在と價値に於ていづれが時代を大多に支配し活動し進化し行くか時と場合によつて其の優劣は決し難きも、其の根本は文筆に依つて價値づけらるゝ事は明白なる事實である。會員諸君が祖山の辯筆を自らほころの懐はあるが、はたしてそれが人間精靈の奥扉を開き得るか、辨と文とは或点まで一致と同理を認めればならぬ。然るに此の樓神はどうが、余りに紙上を醜くするやうな苦言は爲し得たくない、只校正の不備と編輯の不振を謝し、追々諸君の努力と奮闘を祈るばかりである。

毎月寄送して下さる書籍雜誌等を、一同熱心に拜見して居るから其の御芳名を録し、度みて謝意を表しよう、大崎學報(日蓮宗大學殿)、天業民報(天業民報社殿、日宗新聞(日宗新聞社殿)、身延教報(身延教報社殿)、雄辯、太陽、中央公論、現代、解放、改造、望月軍四郎殿)唯一、覺醒(大日本覺醒團體、三寶(森江書店殿、宣明庵(日蓮妙龍會殿、閉の教(京城閉教社殿、信友會月報(信友會月報部殿)、あさひ(大阪あさひ社殿、傳道(大阪傳道團體、開顯(天業民報社殿)微妙(大阪顯正護國會本部殿)、東海中正新聞(佐藤天洲殿)、香川日報(黒澤松南殿)、購讀雜誌の中に無礙光、合掌、法華、中學生、中學世界、佛教學雜誌、第一義、宗報、密宗學報、佛教研